



倉方俊輔

「悪」のル・コルビュジェ
第8回・時代からの出航

優れた設計者が時代に乗って本領を発揮するとすれば、「建築家」は時代からズレたときに本領を発揮する。建築におけるモダニズムの中に、そんな作家の領分をはっきりと確保したのは、ル・コルビュジェだった。大文字の建築は延命した。モダニズムは建築の歴史の中の1ページとなった。作家の死が訪れることもなかった。建築の改革者ではなく、建築という聖域の擁護者としてのル・コルビュジェの像が明瞭になったのは、第二次世界大戦の後。戦後をちょうど20年生きた彼は、1965年に没した頃から一層、戦後から遡行して分析され、研究され、世俗の荒波の中にあっても建築を守り抜いた聖人として、そのように建築家が存在できることのアイコンとなった。

マルセイユのユニテ・ダビタシオンは、その始まりである。1945年に復興・都市計画大臣のラウルドーリーから設計の話を持ちかけられ、官僚らとの多くの交渉の中での敷地や計画の変転を経て、1947年に着工した立体都市が、1952年に完成した。

眺められるのは、打放しコンクリート仕上げで自らが何でできているかを露わにした、長さ約165m、幅が約24m、高さが約56mの直方体である。17層に337戸が収まっている。想定されている入居者は約1,600人。单身者向けから大家族向けまで、23種類の住戸タイプがある。

巨大な直方体は34本のピロティに支持され、大地から浮き上がっている。ピロティは人間のスケールよりもはるかに大きい。構造体でありながら、描くカーブの中に配管類を通して。構造と設備は、直上のメガストラクチャーに続いている。ル・コルビュジェが言うところの「人工土地」だ。中には機械設備が入る。構築された人工空間を、ピロティと人工土地はダイナミックな造形で持ち上げ、地上を歩行者に開放したことを誇っているのだ。

——[p.2-3に全文掲載]



光嶋裕介「ル・コルビュジェのある幻想都市風景《マルセイユのユニテ・ダビタシオン》
～Urban Landscape Fantasia with Le Corbusier 《Unité d'habitation Marseille》」